

誘

Ogawa Tatsuo

小川
竜生

長編企業ハードボイルド
文庫オリジナル
「窓際の狼」シリーズ

惑



光文社文
KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

文庫オリジナル／長編企業ハードボイルド

ゆう わく まどぎわ おおかみ
誘 惑 「窓際の狼」シリーズ

著 者 お がわ たつ お
小 川 竜 生

2002年3月20日 初版1刷発行

発行者 濱 井 武
印 刷 慶 昌 堂 印 刷
製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Tatsuo Ogawa 2002

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-73292-5 Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫オリジナル／長編企業ハードボイルド

誘 惑

「窓際の狼」シリーズ

たつ お
小川竜生



光 文 社

解説 大多和伴彦

誘

惑

——「窓際の狼」シリーズ——

アパートのポストに三崎恵子みさきけいこからの手紙が届いていた。ここ久しく途絶えていたものだが、
館脇一輝たてわきいっけいはそれを手にし、口にしていたビールを置いて、封を切った。

中身は結婚式の招待状だった。二枚の手紙だった。場所、日時、そしてありきたりの結婚式
案内の文面。手紙には三崎恵子のあの流れるような美しい文字で、文節がつづられていた。

——わたし、六月に結婚することになりました。

館脇には衝撃的な文字だった。

三崎が結婚か——。

館脇はその場に立ち尽くして、彼女からの結婚通知をじっと見つめていた。

あの三崎が——。

三崎は心に深い傷を負った女性だった。そのすべてが館脇に起因しているといっても過言で
はない。

あれからもう、六年の歳月が過ぎる。

館脇はあの日の出来事を昨日のことにように思い浮かべる。

事件のあと、館脇は再び大阪を離れ、東阪^{とうはん}広告東京本社に戻ってきた。それ以後、筆無精^{ふでぶしやう}の館脇ではあるが、折りに触れて三崎恵子に手紙を書いたのだが、彼女からの返答はなかった。

それがここ二年ほど前からぼちぼち彼女からの手紙が届くようになってきていた。大阪の天候のことや、身近に起こった些細^{ささい}な出来事など、手紙には現在の彼女の心情に触れるものは一行とてなかったのだが、館脇はそれらの手紙を彼女の心の立ち直りの兆^{きざし}と見ていた。彼女の心の傷は深かった。もしかすると、それは館脇の勝手な思い過ごしなのかも知れないが、ほんの少しでも彼女の傷の癒^いえることを、願っていた。そしていつの日か再びあの三崎恵子に戻ることを。

館脇はやっと彼女にその日が訪れたかのような気がして、心に安堵^{あんど}の気持ちをは浮かべた。

まだ梅雨入り前だというのに、ここ二、三日真夏日のような暑い日が続いている。

ゴールデンウィークもとつくに終わっているのだが、銀座のサラリーマン達はいまだに休みで鈍^{なま}ったからだにムチをうち、この暑さの中で懸命に働いているというのに、この男だけは違う。

東阪広告東京本社第二SP局部長、館脇一輝。平社員の頃から万年リストラ候補にあがりながら、日本の大手代理店五社の仲間入りをする東阪広告の部長にまで上りつめた男である。ただし、館脇の場合、部長とはいえ、限りなく窓際族に近い部長職だ。

主な仕事はスーパー関^{かん}西^{さい}堂^{どう}からの新聞の折り込みチラシ広告の原稿集め。

たとえば明日の安売り商品の原稿を関西堂の販^{はん}促^{そく}から情報をもらい、それをデザイン室に持っていく。デザイン室で制作されたチラシをチェックし、それをクライアント側に持ち込み再チェックしてもらう。別に広告代理店の社員でなくともできる仕事なのだが、彼はそれを、専^{もつぱ}ら彼の唯一の部下である真田^{さなだ}という男に任せつきりにして、本人は午前中のほとんどを会社か

ら十分ほど離れたところにある喫茶ダークホースに入り浸っている。以前はアモーレとかサラブレッドという喫茶店に入り浸っていたのだが、午前中なら必ず舘脇はそこにいるという風評が広まり、何かというところとすぐそこに電話がかかってくるようになったので、最近になって場所を変えた。暇な喫茶店で、客は舘脇しかない。

舘脇は今朝から三杯目のコーヒーを飲みながら、競馬新聞と睨めっこしていた。競馬は好きだがいつも大穴一点買いなので当たることは少ない。それでも彼は懲りずに、大穴ばかりを狙い続ける。金をドブに捨ててるようなものだと言口を叩くものもいるが、彼にすると、誰もが勝てない、負けると信じていた馬が、誰もが勝つと信じて疑わない馬を負かす、そこにえもいえぬ感動を覚えるのだそうだ。

「舘脇さん、お電話です」

マスターが大声で舘脇を呼ぶ。

「電話？ 誰だ」

この喫茶店に舘脇がいるのを知っているのはいまのところ部下の真田だけだ。

「種田たねださんの秘書って方からです」

「種田の秘書？」

種田というのは東阪広告の社長である。数年前、東阪広告全社の大幅リストラを執行し、彼自身も一度はその責を負って社長の座を辞し相談役に収まったのだが、彼の跡を引き継いだ社

長が毎朝新聞社から送り込まれてきた能無しで、僅か一年足らずでその業績を相当悪化させてしまった。そうなつては種田の行つた大幅リストラも意味をなさない。

そこで他の役員や、社員、組合、それに毎朝新聞までもが、彼の再登板を願ひ、その後、再び社長職に復帰したのだ。

「あのじい、どこへ行つても嗅ぎつけてきやがる」と館脇はばやく。「いないといつてくれないか」

「今はお留守だそうです」

早速マスターはそう答える。

「バカヤロー、それじゃあ、ここにいますって答えてるようなもんじゃねえか」

マスターは館脇の気持ちなどお構いなしでそれだけ伝えるとさつきと電話を切った。

十分後、再び館脇に電話がかかってきた。電話の主はさつきと一緒だ。

「館脇さんはもうお帰りですかつて」

マスターが大声でさく。

「だからおれはここにはいねえんだよ」

「あ、う、ここにはおいでにならないそうです」

マスターは今度も同じようなことを伝え、電話を切った。

「バカヤロー。それならまた電話がかかってくるぜ」

本当に気の利^きかない男だ。舘脇はちつと舌打ちをしながら読みかけの競馬新聞に視線を戻した。

それから何分経^たつただろうか、舘脇は目の前に何やら人の気配を感じ、視線をあげた。視線の前にはぴたつとからだの線に沿った黒のスカートに身を包んだ見事に腰骨の張った女の下半身。スカートの横には深いスリットが入っていて、その隙間^{すきま}から白くて上質の脂肪分をほどよく蓄^{たくわ}えた太股が覗いている。

腰骨のあたりから上半身へと視線をはわした。上半身には少しパールピンクのかかった白いシルク地のブラウス。さらさらとした薄い生地でインナーには同系色のブラジャー。生地が薄いので正面からでもその形の良さがよくわかる。

「やはりこちらにおいでだったんですね」

女は種田の秘書で、烏城^{うじょうしずか}静香という。以前、一度、種田に紹介されたことがあるのだが、抜群に美人でスタイルがよい。去年の暮れ頃、別の会社から種田に引き抜かれてきた女で、美貌だけでなく、頭も切れるという噂だ。

「今夜七時に、社長が七草^{ななくさ}でお会いしたいそうです」

七草というのは銀座にある有名な料亭だ。舘脇はこれまでも種田に呼ばれ何度かそこへ足を運んだことがあるが、プライドの高さばかりが鼻につく、クソみたいな店だ。

「今夜七時について、おれは忙しいんだよ」

「社長は多分あいてるはずだからとおっしゃってました」

「勝手に決めつけるんじゃないやねえ」

種田が館脇を呼びだすときは何か問題のあるときだ。特にこうして女をよこしてくるときは注意しなければならぬ。これまで何度か種田の依頼で会社の難問を片づけてきたのだが、できればもう勘弁願いたい。

「私も同席させていただきますので」

「あんたも来るのか」

秘書を同行させるとはこういう用件だ。これまでにない種田のやり方に館脇は首をひねる。

「種田からそういわれております」

鳥城は館脇を見下ろしながら微笑ほほえんだ。その微笑みにはどきつとするほどの色香がある。

「仕方ねえなあ」館脇は険しい表情を作り、

「時間に遅れないようにといつてくれな、おれだって忙しいんだから」

とぶっきらぼうに答える。

「承知しました」

鳥城は笑いをこらえるような顔になり、館脇に背を向け喫茶ダークホースを出ていった。その腰のふり具合が実に見事である。

「ねえ、ねえ、今の美人どなた？」

烏城が喫茶店を出ていくと、マスターが興奮気味に飛んできた。

「うちの社長秘書だよ」

「社長秘書？　すごいなあ。わたしやまたどこかの女優さんでもやって来たのかと思いましたよ。それで慌ててサイン色紙なんか用意しちゃって」とマスターはだらしない笑みを浮かべる。「また来ますかね、館脇さん。なんなら、うちの常連になつてもらつてくださいよ。あんな美人が常連客にいるって噂が広がると、うちもたちまち満員になる」

マスターはよほど烏城の美貌に度肝を抜かれたのか、興奮気味に喋りまくる。館脇はいい加減うんざりしてきて腰を上げる。

「ねえ、ねえ、館脇さん——」

帰ろうとする館脇にマスターはしつこくつきまとう。

「知らねえよ」

そんなマスターを振り払うようにして、館脇は喫茶店をあとにした。

喫茶店を出てから、活気のない真昼の銀座をぶらぶらと歩いて会社に戻る。人気の少ない路面に照りつける太陽は夏の日差しのように、たまらなく暑い。こうしてぶらぶらと歩いているだけでからだのあちこちから汗がにじみ出る。

東阪広告東京本社は銀座二丁目の外堀通りにほぼ面したところに建つ貸しビルの七階八階にある。館脇の所属する第二SP局は、八階の第一SP局やマーケ、クリエイティブなどと同じ

フロアなのだが、フロアの中央に陣取っている第一SP局とは違い、フロアの北の隅の、窓も何もない二坪ほどのスペースに二台のデスクが並べられているだけのところだ。デスクの一つは館脇のもので、もう一つは彼の唯一の部下である真田のもの。周囲をスチールの柵で囲まれ、フロア内でもそこだけが孤立していて、蛍光灯をつけているというのに昼間でも薄暗い。

そんな部屋を見て、窓際族ならぬ、壁際族などと陰口を叩くものもいるが、それでも館脇はその場所を気に入っている。めったに人も訪ねてこないし、周囲の雑音も遮断されていて、結構居心地が良い。

「真田、おまえ、あの女にどうしておれの居場所を喋った」

デスクに戻ると、真田がチラシ広告の清刷きよずりのチェックをしているところだった。

「はっ？」

「とぼけた顔をするんじゃないやねえよ。秘書だよ、秘書。社長の女秘書だ」

「ああ」

真田は館脇にいわれてやっと気づいたふりをする。

「何が、ああだ。バカヤロー。あそこの場所は誰にもいくなつて釘さしてただろう」

「はあ」

どうせ真田は、烏城の色気にくらくらとして、ペラペラと館脇の居場所を喋ったに違いない。それが証拠に、真田は何やらそわそわしながらチラシの清刷を眺めておちつかない。

「あつ、そうだ」

真田は急に思い立ったように突然立ち上がり、

「この清刷、いますぐに持ってこいつて電話があつたんすよ」

と慌てて清刷を社の封筒にしまい込み、

「すみません出かけてきます」

と亀のように頭を一度突きだしてから引込めて、スチールの棚で囲まれた部屋を飛び出ていった。

「逃げるんじゃねえ」

真田は一度も後ろを振り向かず、走り去ってしまった。

「じゃあねえなあ」

結局、その日一日真田は部に戻ってこなかった。

午後五時半が過ぎて、種田との待ち合わせ場所である七草に行く前にちよつと一杯引っかけようとして、館脇は銀座通りまで出て、三丁目の角を西に入つたところにあるバー・ナパームに立ち寄つた。

名前は物騒だが、年季の入ったカウンターと酒棚が、いつも丹念に磨き込まれていて、枯れていて落ち着いた雰囲気のある店である。最初にバーテンダーをやっていた亭主に死なれ、今は代わりにその女房がシェーカーを振っているのだが、初老の女の振るシェーカーには、どこ

か哀愁のようなものが漂っている。そう思っているのは館脇だけかもしれないが、その哀愁に引かれてたびたび店に足を運ぶ。

「いらつしやいませ」

白のワイシャツに黒の蝶ネクタイ。髪を短くして中性的な雰囲気^{かも}を醸し出している初老の女バーテンダー。浮き沈みの激しい夜の世界で、女一人がシェーカーを振って生きていくのも並大抵のことではないだろう。

客はまだ誰もいない。館脇は十人座れるカウンターの一番左の端に腰掛けた。

「ビールを」

バーテンダーがビールの栓を抜く。ポンという弾けた音が心地よい。一杯目はバーテンダーがビールをグラスに注いでくれる。グラスの中の泡の立ち方が絶品だ。館脇はそれを一息で飲み干す。ほろ苦い冷たさが、喉^{のど}から胃の中を駆け巡る。

「最近、これは来るのかい」

二杯目のビールを自分で注ぎながら館脇は右手親指を立てた。これというのは社長の種田のことだ。別にこの初老のバーテンダーと種田とができていないが、館脇が種田にこの店を紹介すると、彼はこの店がよほど気に入ったのか、暇さえあればいつでもこの店を訪れているということだ。おかげで館脇の足は少し遠のいた。誰しも仕事が終わったあとまで、社長と席を並べて酒など飲みたくないものだ。